

「日本語学習動機がない学習者の学習動機づけの変化に関する研究」

A STUDY ON THE MOTIVATIONAL CHANGE OF JAPANESE LANGUAGE
LEARNING FOR LEARNERS WITHOUT MOTIVATION

横田隆志, 北陸大学

Takashi Yokota, Hokuriku University

1. はじめに

外国語学習に対する動機づけは、学習者の第二言語習得に大きな影響を与え（小柳 2004）、学習者の目標を成功に導くための要因でもある（Oxford 1996；Dörnyei 1996, 1998）と言われている。そのため、目標言語に対する強い動機づけがある学習者は「成功した学習者」になりやすいとされている。しかしながら、全ての日本語学習者が日本語学習を望んで日本語学習を始めているわけではない。例えば中国の大学で日本語を学んでいる大学生である。中国の大学入試制度では学生が希望する学科に入学できるとは限らない（茂住 2003）。日本語以外の専攻を希望していたにも関わらず、日本語専攻を条件に大学に入学し、日本語を専門として学習を始める大学生もいる。このような学習者は日本語学習に対する動機がほとんどないまま日本語学習を始める。しかし、その後、日本語を学習し、日本語能力試験 N1 に合格し、日本に留学をする学生もいる。自分で選択した専攻でもないのに、短時間で日本語をマスターし、日本に留学をする学習者はどのように気持ちを切替えたのだろうか。学習の過程で日本語学習に対する動機がどのように変化したのかを調査することによって学習者の動機づけについて知ることができる。

そこで、本研究では、日本語学習動機がない学習者の日本語学習の動機づけがどのように変化していったのかを明らかにする。動機の変化に焦点を当て、個人の変化の観点に注目する。動機の変化に関してどのように動機づけが変化していったのか、その変化は何と関連していたのか、動機づけの変化のプロセスを明らかにする。

2. 先行研究

2-1 「自己決定論」における動機づけ

学習者の言語学習に対する動機づけを心理的な立場から、「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」に分類をする方法がある（Deci & Ryan 1985）。内発的動機づけは、学習者の内面から出てくる動機によって学習が誘発される状態で、学習者は学習すること自体に満足する。例えば、目標言語そのものに関する関心や興味などである。一方、外発的動機づけは、学習者の外側からの刺激や自分の価値観によって学習が誘発されるものであると考えられている。これは、罰のようなマイナスの外的要素や賞や報酬などのプラスの外的要素によって、目標言語を学習する動機が現れる場合である。

これらの動機づけは、従来は対立的に位置づけられていると考えられていた。しかし、Deci & Ryan は、これらの動機づけはそれぞれが独立したものではな

く、連続したプロセスとして捉え、学習者が自律的に学習をすれば、内発的動機づけが高まるように自己決定の程度によって段階的に動機づけが変化するものであると考えた。これを「自己決定理論」と呼び、動機づけについて説明している。自己決定理論では動機づけを①「無動機」、②「外発的動機づけ」、③「内発的動機づけ」の3つに分類している。①の無動機は目標言語に対して特定の目的を持っていない、学習者は何の決定もしていない状態のことである。②の外発的動機づけは、自己決定の度合いが低いものから高いものへと「外的調整」、「取り入れ調整」、「同一化調整」、「総合的調整」の4つの段階に分けている。八島（2003）では次のようにまとめている。

「外的調整」

報酬を目的とする。罰を避けるなど完全に外的な力に抑制される。

「取り入れ調整」

自分や他者からの承認に注目し、自分に課したルールを守らないといけないという気持ち。

「同一化調整」

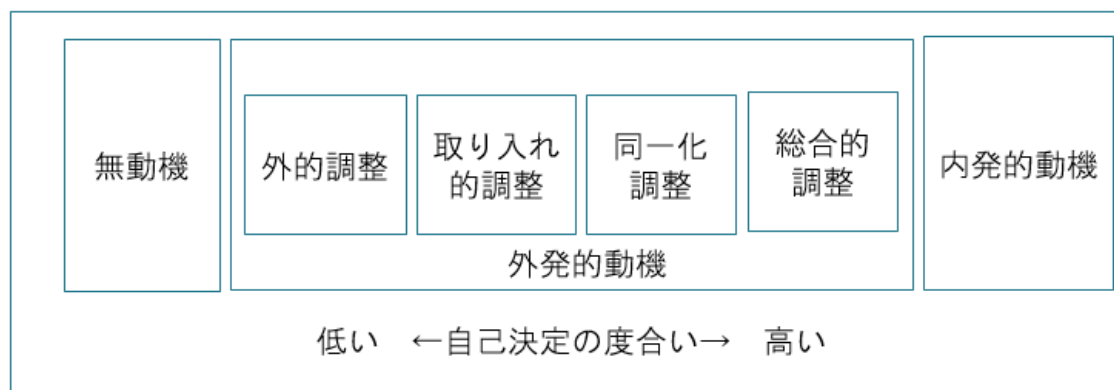
活動の意識的価値付け、目標の自己是正。その活動に価値をおき、その有用性を認識して個人的に意味のある目的のために行う。

「総合的調整」

目標の断層的統合、調和。自分のアイデンティティーなど調和の取れた選択行動。

これらを原田（2008）では「自己決定理論による動機のプロセスモデル」として次のような表で示している。

表1 「自己決定理論における動機づけのプロセスモデル」



また、王（2014）は、中国の大学入試により日本語を専門として学習を始めるような動機づけを中国独特の環境で生み出された「専攻なので学習しなければな

らない動機」として「義務的動機づけ」と呼んでいる。このような動機づけは、学位を取得するためという一種の「報酬」や大学で勉強することができなくなるという「罰」を避けるためというような外的要素が強い動機づけであり、「外的動機づけ」と重なる部分は多いと思われる。しかしながら、この動機づけは、ただ単に報酬や罰を避けるためといった単純な動機づけではない。このような学習者は日本語が専門となり、それを勉強しなければ専門性も得られないというかなり特殊な環境で日本語学習を開始しなければならず、そのための学習の動機づけである。

2-2 中国人日本語学習者に対する動機づけの変化

動機づけ研究では、質問紙を用いた量的調査が多く（高橋・平山 2014）、中国人日本語学習者を対象とした研究でも動機づけの属性についてのアンケート調査から日本語学習者の動機づけについて明らかにしているものが多い（瀬尾 2011）。しかし、Dörnyei（2001）は、動機づけは学習者の環境や心情の変化に伴い変化するものであり、動機づけをアンケートでは分析することができないと述べている。学習者の動機づけについては、ある期間の動機づけの変化をプロセスとしてみる必要がある。そのために動機づけ研究にはインタビュー調査など質的な調査方を用いて学習者の動機づけの変化のプロセスを研究するものも見られるようになってきている。

中国人日本語学習者の動機づけについてインタビュー等の質的研究をしているものは、中井（2009）、瀬尾（2011）、千葉（2012）、趙（2015）、王（2014）などがある。中井は、日本での中国人就学生を対象に動機づけの変化とそのプロセスについて調査を行った。その中でも学習動機が減退するプロセスに注目している。瀬尾（2011）は、香港の成人日本語学習者を対象にし、学習者の動機づけの変化のプロセスについて調査を行い、外発的動機づけと内発的動機づけや学習意欲の継続や動機の減退要因などについて明らかにしている。しかし、中井の調査では学習動機が低くなる時の原因を探るのが目的の研究であった。また、瀬尾は香港の日本語に興味がある学習者を対象に調査を行っている。

千葉（2012）は日本の大学に在籍している留学生を対象に動機づけの変化のプロセスを明らかにしている。千葉は、来日後の日本語学習動機の変化のプロセスに注目し、来日後、日本語学習動機がどのように変化していったのかを調査している。また、趙も日本の大学生を対象として、日本語学習に対する動機づけの変化のプロセスを日本語学習開始時、日本語学習開始～留学までの期間、留学～留学後の変化を明らかにしている。留学を一つのキーワードとして留学によってどのように動機づけが変化したのか、留学前と留学後にどのように動機づけが変化していったのかに焦点を当てている。留学は動機の深化と具体化をもたらすものであり、留学を意識することでも日本語学習の動機づけの変化が見られるのではないだろうかと考えられる。

そして、王（2014）は中国の大学の日本語学科1年生15名を対象に学習動機の変動を調査している。そのなかには日本語の学習を希望していなかった7名も含まれており、日本語学習を希望していなかった学習者を1年間調査してい

る。しかしながら、この研究では日本語科を希望していた学習者も8人いて、日本語科を望んでいなかった学習者に焦点は当てられていない。また、大学の日本語科での1年間の調査のため、その後、日本語学習についてどのように動機が変化していったかは分からないといった問題がある。

3. 本研究の目的と方法

3-1 本研究の目的

本研究では、日本語学習動機がない中国人日本語学習者が日本語学習を始めたあと、どのように日本語学習についての動機づけが変化し、「成功した学習者」になったのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、動機の変化に焦点を当て、個人の変化の観点に注目する。動機の変化に関してどのように動機づけが変化していったのか、その変化は何と関連していたのか、動機づけの変化のプロセスを明らかにする。

3-2 調査概要

①調査期間：2017年4月～7月

②調査対象者：北陸大学編入留学生6名（中国）

調査対象者に関しては、次の3つの条件を全て満たしている学習者に依頼をした。1. 自分の希望していた学科に入学できずに日本語学科に入学した。2. 日本語能力試験N1取得済み。3. 日本への留学をしている。

調査では、学習者の語りに重点を置くために1対1の半構造化インタビューを行った。インタビューでは、日本語学習をすることになってから留学を決定するまでの2年を振り返ってもらい、動機づけについてそれに関する具体的な出来事について語ってもらった。インタビューの時間は各一時間程度で、日本語で行った。具体的な出来事に関しては、①日本語学科に入学する事になった時、②日本語学習がスタートした時、③留学前の日本語学習期間、④留学を決めた時、の4つの出来事を中心に動機づけについてのインタビュー調査を行った。

4. 調査結果

Aさんのケーススタディ

①英語の勉強をするために大学進学を決定したので、英語の勉強ができなく、残念な気持ち。日本語の学習については全く興味がなく、将来について考えた

②英語の勉強は自分でできるので、大学では日本語の勉強をしてみようと思った。しかし、日本語に関しては相変わらず興味はなかった。小さいころ見た日本のアニメを思い出したが、日本語学習とは直接的な関係はなかった。

③

- ・日本語の先生がとても親切だったので、日本語について少し勉強してみようと思った。
- ・言語に興味があったので、日本語の学習も楽しくなってきた。
- ・しっかりと日本語の勉強を始めようと思った。
- ・毎日の学習で一年間でN2合格し、楽しみが増えた。

- ・試験に合格できることで達成感を感じた。
 - ・N2 合格後はN1 合格を目指して学習した。
 - ・日本語の歌を日本語で歌えるのが楽しく感じた。
- ④日本語を学ぶのには中国では環境がよくないので留学を決めた。将来は日本語を使って仕事をしたい。また、それと同時に日本での生活に興味を持った。留学をすることが日本語学習の動機づけにはなっていない。

Aさんは日本語学習開始時には日本語には興味がなかった。しかし、なんとなく日本語を学び始めているうちに試験に合格することで日本語学習に興味を持った。そして就職を考える上で日本への留学を決めた。Aさんの動機づけは、特に強いものがあつたわけではないが、試験に合格することで日本語学習の動機づけにつながつた。また、留学と日本語学習の動機づけに関してはあまり関係がないようであつた。日本文化的なものとの関わりについては、日本語の歌があるがそこに日本語学習との動機づけにはあまり関係がなかった。

Bさんのケーススタディ

①医科大学で看護を学ぶ予定だったが、日本語科に回された。日本に関する知識はあつたが、自分自身が日本語を学ぶということについては想像もしていなかつたので、興味はなかつた。

②看護は親の希望だったので、ショックはなかつたが、日本語を学ぶ準備はできてなかつた。ただ、日本の歌やドラマは好きだったので、なんとなく始めようかなと思つた。

③

- ・日本語というより勉強そのものは好きだったので、日本語の学習を楽しんで感じていた。
 - ・学習をすることが好きだったので成績もよかつた。
 - ・日本のドラマを見るとそこで話されている日本語が分かるので、日本語学習が楽しくなつてきた。
 - ・話すのは怖くて嫌だったが、ドラマを見るための知識を得られて楽しくなつてきた。
- ④日本の文化や生活に興味を持ち、将来日本語を生かして就職したいと思うようになった。日本語学習で話すことが苦手だったのでそれを克服したいと感じるようになった。留学を決めたことで動機づけは変化していない。

Bさんは言語とは全く関係のない看護を勉強するために大学を受験したが、日本語学科に合格した。最初は、興味がなかつたが、日本の歌やドラマのイメージからなんとなく日本語の学習を始めた。学習を継続していく一番の動機づけは「学習そのものが好き」でそのために成績も良かつた。ドラマの日本語が分かることは嬉しかつたが、それが特に日本語学習の動機づけにはなつていなかつたよ

うである。留学に関してはAさんと同じように就職するためによって日本語学習の動機づけに大きな変化はなかったようである。

Cさんのケースステディ

- ①大学でヨーロッパの言語を勉強したかったので、外国語大学へ入学した。その後、日本語とロシア語、英語から選択を求められ、日本語科に合格したが、あまり興味はなかった。
- ②仕方がないので、日本語を学ぼうと思った。興味は体験によって得られるものと考えていたので、日本語学習の開始については抵抗がなかった。小さい頃見たアニメを思い出したが、動機には結びつかなかった。
- ③
 - ・特に日本語についての興味はなかったが、試験の成績が良くなったので、資格試験に合格しようと思い、勉強していた。
 - ・試験に合格すると更に日本語学習についての興味がでてきた。
 - ・日本文化やサブカルチャーにはあまり興味がなかった。
- ④大学院に入るためには中国よりも外国のほうが良いと思い、日本へ留学することを決めた。留学をすることになったがそれによって動機づけは変化しなかった。

Cさんも大学入学時には日本語学習に興味はなかった。しかし、一度体験をしてみるのも悪くないと思い、強い動機づけがないまま日本語学習をスタートした。勉強そのものが好きで、日本語を学び、試験にも合格した。これによって日本語学習の動機づけが強くなった。日本文化やサブカルチャーにはあまり興味がなく、それが学習動機と結びつくことはなかった。留学も進学のためにしようと思ったが、それによって日本語学習の動機には直接はなっていなかった。

Dさんのケーススタディ

- ①ジャーナリズムの勉強をしたかったので、残念な気持ちだったが、そんなに落ち込まなかった。日本語に興味はなかったが、気持ちの切り替えは早いので、日本語学習をしてみようと思った。
- ②好きだからするのでなく、やってから興味をもつ性格、日本に関する知識は全くなかった。英語は長年学習していたので、新しい言語である日本語をマスターしてみようという気持ちがあった。
- ③
 - ・勉強すること自体が楽しいと感じていた。知らないことを学ぶことが楽しく、日本語の学習も知らず知らずのうちに進んだ。
 - ・アイドルにも興味を持ったが日本語の学習とはあまり関係がない。
 - ・日本語能力試験N1に合格して、更に日本語学習に興味を持った。
- ④留学をすることには高校生の頃から興味があった。日本語を学ばなくても留学は決めていたが、日本語の専攻になったので大学に入ってすぐに留学を決めた。その時点での日本語学習に関しての動機づけの変化はなかった。

Dさんも言語とは関係のない専門を学びたかったが、日本語科に合格をした。気持ちの切り替えは早く、すぐにあきらめて、日本語の学習を始めようと思った。新しいことを学ぶことが好きで、それが日本語学習の動機づけになっていた。また、試験に合格したことが日本語学習の新しい動機づけになっていった。留学を決定した時期は早かったが、直接それが日本語学習の動機づけにはなっていなかった。また、日本のアイドルに関しては興味があったがそれが日本語学習との関係はあまりなかった。

Eさんのケーススタディ

①フランス語、ドイツ語、スペイン語を学びたかったので、日本語専攻の合格は残念な気持ちだった。日本語については全く興味なしだった。

②自分の希望がかなわないのも人生なので、日本語を学ぶことを決意した。また、当時、領土問題がニュースでとりあげられていたので日本に関して「悪い意味」での興味はあった。

③

- ・初めて勉強したときに新鮮さを感じた。新しいことを学ぶことに対して興味を持った。

- ・日本語の発音に興味を持ち、どのように日本語らしい発音をしたらいいか努力した。

- ・日本語学習の一環としてアニメを見て、日本の学生生活に興味を持った。

④日本についての興味よりも日本語に魅力を感じた。そして、もう少し日本語について学びたいと思い、日本への留学を決めた。留学することを決めた時に日本語学習に対する動機づけは変わらなかった。

Eさんも大学の日本語学科に合格したときには日本語に対して全く興味がなかった。しかしながら、当時、中国のニュースで見た悪い日本のイメージから日本を知るために日本語学習を試みようかと感じた。学習開始後は新しいものを学ぶ新鮮さとそれに対する興味で日本語学習を継続した。また、日本語の発音に興味を持ち、それが日本語学習の動機づけになっていった。文化的なものに関してはアニメがあったが、アニメの中に出てくる「日本の生活」に興味があり、それが学習動機になった。留学を決めたのは日本語に対する興味であったが、それが日本語の学習動機には直接は関わりがなかった。

Fさんのケーススタディ

①絶対にスペイン語を勉強するつもりで大学受験をしたので、日本語専攻を知ったときは泣いた。日本について、日本語について興味はなかった。

②日本語の勉強はしたくない、気持ちも良くなかった。自分の未来のために何をすればよいか分からなかった。日本語を学ぶこともなかなか決定できなかった。

③

- ・日本語学習に関する興味はなかったが、大学を卒業するために勉強してい

た。

- ・勉強は好きだったので、テストで一番をとることを目標にした。
 - ・日本語を好きになろうと工夫をするが、難しかった。そこで、ドラマを見ることにしたが、好きにはなれなかった。それでも200本くらい見ると日本語の語彙が増え、リスニングの力がついたと感じた。
 - ・ドラマに登場したアイドルが好きになり、日本語も徐々に好きになった。
 - ・2年生の初めにN1に合格し、日本語が好きになった。
- ④N1に合格した日に留学を決め、日本語についてもっと学ぼうと思った。留学をすることで日本語学習に関しての動機づけの変化はなかった。

Fさんも他の5人と同様に日本語学科に合格した際には日本語について全く興味がなかった。その後も日本語に関する興味はなく、学習動機はなしであった。ただ単に大学卒業を目標とし、日本語の学習を始めた。そこで、クラスで一番を目指すためだけに日本語学習を始めた。また、日本語が好きになるような工夫として日本のドラマを見るが、日本語学習に対しての動機づけはなかった。しかし、ドラマを見ることで日本語の能力も高まったことを感じていた。その後、ドラマに出演していたアイドルが好きになり、それが日本語学習の動機づけになった。また、日本語能力試験N1に合格し、それが日本語学習を更に促進するものとなったが、動機づけの変化は見られなかった。

5. 考察

今回の調査から4つのことが明らかになった。まず、一つ目は、日本語学科に合格した時点では全ての学習者は日本語学習に興味がなかったということである。Dさんは気持ちをすぐに切替えて、日本語学習をしようと思っていたが、他の5人は日本語学習に対して全く興味がなく、すぐに学習を始めようとは思っていなかった。これは本人が予想もしていなかったことであり、「無動機」の状態であったからであろう。二つ目は、日本語学習開始時には「なんとなく始めよう」と感じていた学習者が多かったことである。これは、日本語学科に入学という外からの力が強いが、それに対してあまり反発をしないので受け入れていた。これは、自ら「学んでもいいかな」と考える、自己決定度が高い選択である。しかしながら、この理由についてはあまり明確ではなく、自分の現状を受け入れたような感じで日本語学習を開始した。そして、三つ目は、「試験」や「学習そのものの楽しさ」が日本語学習の継続や動機づけになっている点である。「試験に受かることが楽しいので日本語の学習をする」、「学習が楽しいので日本語の学習をする」といった「内発的動機づけ」が日本語学習に影響を与えていた。最後に、留学がキーワードになり、学習の動機づけが行われるのではないかと考えていたが、留学が動機づけになったというよりは、日本語学習が留学の動機づけになっていた。留学をすることによって日本語学習が進んだという意識は今回のインタビュー調査をした6人には見られなかった。

無動機の状態から日本語の学習がスタートし、その中で、反発があり何か新しい動機づけを見つけ、日本語学習に取り組んできたのではないかと予想し、調査

を行ったが、学習の動機づけが「なんとなく初めてみよう」というのは意外であった。この点が、王（2014）が述べている「義務的動機づけ」なのではないだろうか。また、日本文化やサブカルチャーが学習の動機づけに大きく影響を与えているのではないかと考えていたが、これも予想とは反対であった。学習のリソースとしての日本のドラマはあったが、「ドラマを見るために」や「ドラマが大好きで日本語学習をした」という意見は見られなかった。

6. まとめ

今回の調査では、日本語学習動機がない学習者の日本語学習の動機づけがどのように変化していったのかを明らかにした。実際には無動機の状態から明確な動機づけのないままかなり高い自己決定により日本語学習を行っていたことが分かった。また、「試験に合格する楽しみ」や「学習そのものの楽しみ」が学習動機づけに大きな影響を与えていたことが分かった。この点に関しては、中国での高校までの学習活動で身につけた学習ストラテジーも大きく関係するのではないだろうか。しかしながら無動機から学習を開始し、1年半という短い期間で日本語能力試験N1に合格をすることはやはり学習そのものを楽しむといった「内発的動機づけ」の影響が大きいのではないかと考えられる。

今回の調査では日本語学習開始時から留学までの動機づけについて振り返るといふインタビュー調査だったために細かな点での動機づけの変化を捉えることは難しかった。今後は、大学に入学した時点から定期的にインタビュー調査を行い、日々の小さな出来事と動機づけの変化を更に詳しく調査したい。

参考文献

- 小柳かおる（2004）『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク
- 瀬尾匡輝（2011）「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から探る」『日本学刊』14、香港日本語教育研究会
- 高橋 雅子、平山紫帆（2014）「留学生の日本語学習動機の研究に関する現状と課題：日本語教育における文献調査より」『立教大学ランゲージセンター紀要』（31）
- 千葉朋美（2012）「日本の大学で学ぶ中国人日本語学習者の動機づけと自立性—自己決定理論の視点による探索的研究—」『2012年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 趙崢光（2015）「中国人日本語学習者の学習動機の変化のプロセス」『Global communication』5 武蔵野大学グローバル教育研究センター
- 中井好男（2009）「中国人就学生の学習動機の変化のプロセスとそれに関わる要因」『阪大日本語研究』、第21号
- 茂住和世（2003）「中国上海復旦大学日語日文科における日本語教育」『東京情報大学研究論集』 Vol. 6 No. 2

- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における学習動機の研究動向： 第二言語としての日本語の学習動機研究を焦点として」『言語文化と日本語教育』増刊特集号
- 原田登美 (2008) 「留学経験は学習動機にいかに関わっているかー「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化ー『言語と文化』12
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部
- 王俊 (2014) 「中国における日本語専攻学習者の学習動機の変動—H 大学日本語学科 1 年生の質的研究から—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』、(9)
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Deci, E.L. & Ryan, R. M. (2002) . *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press
- Dörnyei, Z. (1994) Motivation and motivating in the foreign language classroom, *Modern Language Journal*, 78
- Dörnyei, Z. (1998) Motivation in second and foreign language learning, *Language Teaching*, 31
- Dörnyei, Z. (2001b) New themes and approaches in second language motivation research, *Annual Review of Applied Linguistics*, 21
- Oxford, R. L. (Ed.) (1996) *Language learning motivation: Pathways to the new century*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press.